開催；平成29年10月28日（土）午後２時～

小篠原遺跡発掘調査現地説明会

野洲市教育委員会が実施している小篠原遺跡の発掘調査において、室町時代前期の建物群を伴った大型屋敷区画を発見しました。

【今回の発掘調査の概要】

1．調 査 地　野洲市小篠原字上池田1284番地　外102筆
2．調査期間　平成29年４月24日（月）～平成29年12月28日（木）（現地調査）
3．調査原因　宅地造成開発　　4．調査面積　合計約5,700㎡
5．協　　力　橋本不動産株式会社・一般社団法人歴史文化研究所

小篠原遺跡調査地位置図

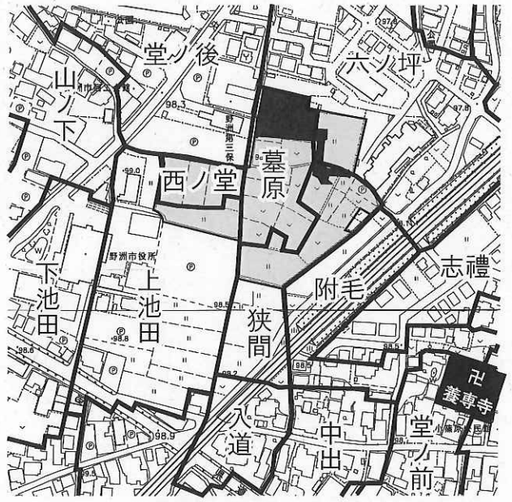
養専寺聞き書き（抄）

養専寺の歴史について

（『小篠原のお寺と宮さん（野洲町史資料集第3冊）』一九九八年野洲町立歴史民俗資料館　から転載）

ご住職の赤松龍馬さんにお寺の歴史についてお聞きしたところ、一八六二年（文久二）の正月九日に本堂が全焼したこと、その時にそれ以前の過去帳や仏さんも全部焼けてしまったことを話されました。このため古いことは分からないとしながらも、昔ここに天台宗か何かの清泉寺（清水寺か）というお寺があったこと、それを赤松氏の先祖の了念という人が蓮如上人のお弟子となって、蒲生郡の弘誓寺の時代からここへ来て、養専寺を建立して浄土真宗に変わったと語られたうえで、こんなことも伝えておられます。

「役場の方に西堂（にしのどう）という地名があって、その裏に墓原（はかわら）という地名があります。向こうに西の堂が建ったって、この東の堂に対して西の堂というたのか、七堂伽藍があったちゅう、福林寺ね、それに対しての西の堂やったのか、その辺のところはわからんのですけど、地名が残っています。寺の創建は今から約五〇〇年前という事になるんですが、何年前かに県庁から庭のイチョウを調べに来たときに、樹齢が推定五〇〇年ということでしたので、記念樹に植えたのかなあと思いました。」



調査地周辺の小字名

◆今回の発掘調査で発見したその他の遺構◆

横板を枠にした井戸（奈良時代）

竪穴式建物（奈良時代）２棟

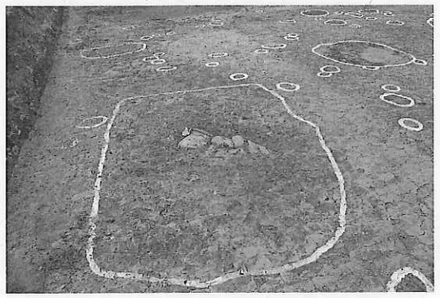
曲物を枠にした井戸（鎌倉～室町時代）

竪穴式建物内の焼土層と製鉄関連遺物（奈良時代）

屋敷地の区画溝西辺

調査区の西辺に沿って屋敷地を区画する大溝を検出しました。この部分の全体幅は４～５ｍになると思われます。

埋土の状況から、溝は何度かの掘り直しが行われたことがわかっています。

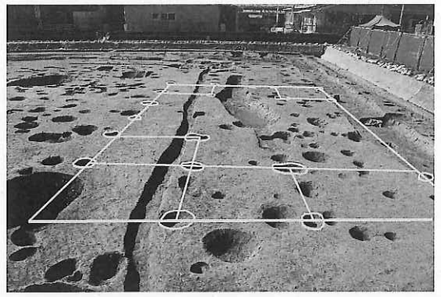


土坑から出土した信楽焼甕

室町時代（15世紀代）の信楽焼の大型の甕が出土しました。

信楽焼は、13世紀後半から生産が開始され、15世紀代になると大型製品が各地に普及するようになります。

小篠原遺跡（平成29年度調査地）遺構平面図



大型の掘立柱建物

屋敷地の北辺に沿って大型の掘立柱建物を検出しました。この建物は他の建物よりも柱穴が大きく、礎石が据えられていた柱穴もありました。屋敷地の中でも中心的な建物であったとみられます。

石組井戸

人頭大の角礫を円形に積み上げて井戸枠としています。

今回の調査で検出した井戸は素掘りの構造がほとんどですが、合計２基の石組井戸を検出しています。

【調査成果の概要】

今回の調査地は、小篠原遺跡の中心域に当たり、周辺では古代から中世までの建物跡が多く検出されるなど、遺構密度の特に高い区域です。調査地はもともと水田地帯の中に存在する畑の微高地であり、「西ノ堂」「墓原」などの小字名が残っていました。

調査の結果、畑地の縁辺を四角形に巡る形で、幅約４ｍ、検出面から底面までの深さ0.5～1.2mの大溝を検出しました。四角形に巡る大溝の内部では、14～15世紀代を中心とする掘立柱建物跡や井戸跡を多数検出し、土師器・黒色土器・信楽焼など、内部で使用されていた遺物が大量に出土しました。

検出した建物跡は、現在のところ合計19棟を数えます。建物跡は、大きなものでおよそ12×８ｍの規模があります。これらの建物は、幾度か建替えられるものの、屋敷地の内部で整然と配置されています。

屋敷地を四角形に区画する大溝は、調査によって西辺・北辺・東辺を確認しています。区画の南辺は未確認ですが、北辺は約90m、西辺・東辺は70m以上の長さがあり、大規模な屋敷地であったことが明らかになりました。

今回検出した建物群や屋敷地の具体的な性格については、現在のところ明らかではありません。ただし、調査地は「西ノ堂」や「墓原」の小字名で、現在は小篠原の集落内にある養専寺の前身にあたる中世寺院が一帯に存在し、15世紀末に廃絶したとする伝承があります。

また、出土遺物にはわずかながら瓦や華瓶・茶器などが認められることから、寺院境内の可能性があり、今後の調査において実態の解明を図ってまいります。